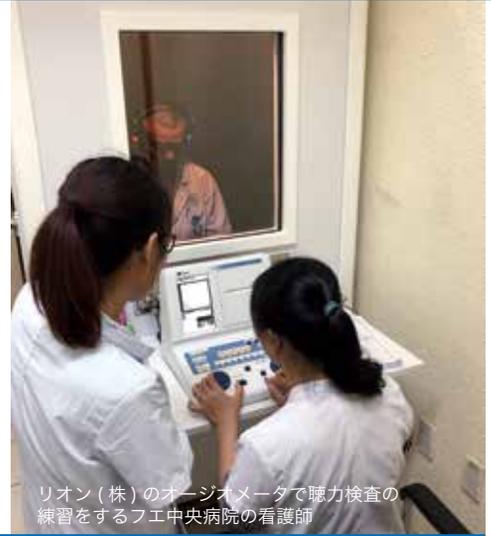


支援不足な領域で貢献

人材育成と製品力の両輪で患者の QOL 改善

国立国際医療研究センター（NCGM）が実施機関として進める「医療技術等国際展開推進事業」。連載第2回は、「リオネット補聴器」などで知られるリオン（株）の事例を紹介する。同社はベトナムで聴覚検査・診断機器と補聴器の普及を進めている。



リオン（株）のオージオメータで聴力検査の練習をするフエ中央病院の看護師

取り残されがちな聴覚医療

リオン（株）は、1948年に日本初の量産型補聴器を発売した補聴器や検査器のトップメーカーだ。86年には防水型補聴器、91年にはフルデジタル補聴器を世界で初めて発売した。

同社はかねてより海外への販売も行っていたが、2015年以降、奈良県立医科大学や国際協力機構（JICA）と連携して本格的に海外展開を進めている。注目するのは、ベトナムをはじめとする東南アジアやインドだ。「日本レベルの市場規模に成長するにはまだ時間がかかると思う。だが、市場が成熟してからでは参入が難しくなる。先手を打っておく必要がある」と、同社の医療機器事業部営業部・第二販売課長の渡部忠行氏は語る。

海外展開の一環として、同社が医療技術等国際展開推進事業の下、ベトナムで2019年8月から実施しているのが「聴覚検査・診断機器および補聴器フィッティン

グ技術普及促進事業」だ。国立国際医療研究センター病院（以下、センター病院）と連携して進めている。

ベトナムの医療技術は、決して低くはない。だが、海外ドナーからの支援を受けている分野に限られるという。「ベトナムの医療は、各国からの支援によって成り立つアンバランスな状態にある」と、センター病院の耳鼻咽喉科診療科長、田山二郎医師も指摘する。

そうした中で、取り残されがちな分野の一つが聴覚医療だ。同国では、国民の1.2%、約100万人が聴覚障害者で、5～17歳の若年層ではその数が40万人とも言われている。だが、聴覚検査・診断機器であるオージオメータによる検査が普及しておらず、実はその実態はよくわかっていない。さらに、検査が普及していないことで聴覚障害者への処置・処方も十分に行えておらず、難聴者の教育や就労といった社会参加が阻害されている。

日本人医師と連携した研修

このため同社は、同事業を通じて聴覚検査・診断機器と補聴器を提供するとともに、聴覚診断専門医や聴覚検査技術者の育成も目指している。これにより早期に難聴を診断し、補聴器の処方や使用中のフォローを通して、難聴者の社会参加と生活向上を目指す。

機器の普及については、北部のハノイ、中部のフエ、南部のホーチミンの地域拠点病院を基点に、系列の耳鼻咽喉科や省病院へ普及させていく戦略を描いている。

同事業では、国立フエ中央病院を対象に進めてきた。センター病院の田山医師、他1名の日本人医師と同社社員が現地で日本の医療状況と耳鼻咽喉科分野に関する講演会、機器に関する勉強会を開催。現地の医師ら延べ150人が参加した。このほか、日本のセンター病院で実施される耳鼻咽喉科の診察や検査に立ち会ったり、同社の工場を視察したりする約1週間の

研修も過去3回実施している。この短期研修にはフエ中央病院の医師や看護師ら12人が参加したほか、医師1人を対象に40日間の長期研修も実施された（コラム掲載）。研修には、デジタル補聴器において重要となる使用者の症状に合わせた調整作業（フィッティング）を学ぶ機会も、現地のニーズを取り入れて組み込まれた。

2020年度の研修はコロナ禍によりオンライン形式で実施されたが、これまでの成果はすでに見られつつある。聴覚検査が実施されてこなかったフエ中央病院では、検査の重要性が理解され、同社から提供された検査機器を用いて耳に疾患のある全ての患者が聴力検査を受けることができるようになった。検査を受けた人数は、2019年8月～20年1月の月平均で約134人に上っている。また同じ期間に、同病院では120人が同社の補聴器を試聴し、27人が計30台の補聴器を購入した。検査機器はベトナム全土で、診断用に



Profile

リオン（株）
医療機器事業部
営業部 第二販売課 課長
渡部 忠行氏

入社より生産管理、購買、経営企画、秘書、人事などさまざまな業務を担当。2013年より医療機器事業部にて中国やインドの海外販路開拓を担当。2015年より現職。

3台、健診用に4台が購入された。

田山医師は、「日本と同様、アジア諸国も高齢化社会に入りつつある。日本の医療技術や健康診断などの保健システムをグローバルに展開し、機器の導入と合わせて正しい使い方を学ぶことで治療の水準が上がる」と期待する。

海外展開へカギを握る官民連携

渡部氏は途上国への事業展開について、「政府の事業を活用することで、一企業では入れないところにも入っていくことができる。保健医療分野は各国で制約があるが、厚生労働省の事業であればベトナム政府との協議も行いやすい」と話す。また同事業の運営



Profile

国立国際医療研究
センター病院
耳鼻咽喉科診療科長
田山 二郎氏

専門は音声・嚥下障害などの頭頸部の機能障害に対する外科的手術、治療。補聴器相談医も務める。2002年より当時の国立国際医療センターに勤務、2014年より現職。

について、同氏は「コロナ禍で、計画通りに事業が進まない時も、NCGMに相談すると企業活動への理解もしてくれ、事業内容や日程変更にも柔軟に対応してくれたのは、ありがたかった」と感謝を述べる。

今後について、「当社の企業理念である『人へ、社会へ、世界へ貢献する』の実現に向けて、開発途上国でも耳鼻咽喉科医の技術力向上と、聴覚障害者が健聴者と同じように社会で活躍できるための後押しを続けていきたい」と渡部氏は語る。

NEXT >>>

第3回 日本の医療の海外展開の行方

医療技術等国際展開推進事業のさらなる発展には何がカギを握るのか、関係者3名が語る。

Column

研修成果と機器を所属病院に導入する



フエ中央病院
耳鼻咽喉科

**レ・コック・
アイン**医師

フエ中央病院は保健省直轄の病院で、貧困層の患者も多い。私は2011年から耳鼻咽喉科で勤務している。日本には、リオンとNCGMが実施した研修で2度、訪れた。1回目は2019年12月から約1週間滞在し、国際医療研究センター病院の耳鼻

咽喉科とリオンの本社などを訪問した。2回目は2020年1月から約40日間滞在。タイなどでも研修を受けたことがあるが、座学が中心で、実際の現場を見る機会が多い今回の研修は新鮮だった。

印象的だったのは、診察と手術のスケジュールの組み方だ。例えば月・水・金は手術、診察は火・木・土と決められている。区別されていて、手術の予定や患者情報も全員に共有されている。この仕組みはフエ中央病院でもすぐに導入した。

センター病院にはリオンの検査機器が整備されており、患者は必要な時にすぐ検査を受けることができていた。

研修先で使われていた機器のほとんどは、フエ中央病院でも購入し設置した。これにより聴力や耳管の検査ができるようになり、現在は全ての新生児が検査を受けられるようになっている。研修で学んだ技術とリオンのおかげだ。今、リオンはベトナム中部でかなり有名で、今後も日本との協力で技術を高めていきたい。